

完璧より拙速で行く

政治も経営も拙速主義で行われている。決断とは欠点に目をつぶり、危険があるのを承知で実行に移すことである。これに対し欠点を大げさに言い立てて実行を中止させようとする人がいる。この人は経営ができない。仕事もできない。自分が皆の足を引っ張る厄介な人だという自覚もない。

経営者にも原発恐い病患者が

この四月に亡くなった渡部昇一氏は原発再稼働推進論者だった。二交通事故で年間約五千人が死亡している。一時自動車は「走る凶器」と言われた。メーカは安全に注力し、ドライバーも安全運転を心掛けるが事故はなくなりな。だからといって「自動車廃止」の声は聞こえてこない。原子力発電所も人間が作った機械である。絶対安全ではない。福島のような事故はまた起こりうる。だが原発の経済面、地球環境保護面でのメリットは大きい。今止まっている原発を早急に動かすべし。

渡部氏はこうした論調で話し書いていた。毎月十数万部出している有名な雑誌Cが氏の論文を掲載した。反響は大きかった。社員教育用に毎月百冊年間契約していた会社Cがいきなり「購読中止」を言ってきた。「原発賛成の雑誌は使えない。Cがこんな考えと知って驚いた」とその会社の幹部は言ったそうだ。C出版の主幹も原発賛成派だが（だから渡部氏の論文を巻頭に載せた）「この会社だけじゃないです。年間契約の継続を依頼しても断られるケースが随分ありました。私は主義主張を変える気はありませんが、経営者層までが「原発恐い病」の重症患者になつてい

るのを知りました」と淡々と語っていた。現在、遅々としてではあるが「基本一基と原発が再稼働を果たしている。賛成派は胸をなでおろし、反対派は歯がみして阻止活動を一段と過激に行っている。福島原発事故の後、国民の「安心安全」を求める声が高まり、その声は日本の空のかなたまで鳴り響いた。

平成二十三年（二〇一〇）五月、民主党の菅総理は中部電力の浜岡原発を停止させた。当時の静岡県知事川勝平太氏は「歴史的快挙」と言って菅の決断をほめたたえた。国民の原発反対の声が天をゆるがす大音響になつてい。それを見て菅は一層の支持を得ようと原発を停止してみせ、川勝はそれに拍手してみせた。この事件の後、日本の原発は全基運転を停止した。電気の供給は旧来の火力発電に回帰し、太陽光や風力などクリーンエネルギーを標準とする電力生産に舵を切った。一般家庭の電気料は五年前の一・五倍に上昇しており、石油の値が上れば今後さらに高くなるのは間違いない。最盛時日本の原発は建設中、数十基が稼働、電力の二五%を供給していた。それが一気にゼロにな

た。民主党権が倒れ自民党安倍内閣が誕生。安倍総理は当初から原発再稼働を政策の優先事項の一つに挙げていた。安倍総理は電力会社に停止を要請した菅のようなやり方はしなかった。というよりできなかった。反対の風が強くて舟を出せなかつた。急進的な反対活動家は力をつけてこむことができて、原発恐い病に患っている普通の人たちの風が逆らって進むことはできない。風が弱まるのを待つしかない。停電の恐れと電気料金の値上がりと火力発電による空気の汚れや環境破壊：それに世界の各国が原発をどんどん作っている。原発を廃

止したドイツは電気が高騰して社会問題になつてい。さらにドイツは電気が足りなくてフランスからフランスの原発で作った電気を買っている。こうした知識や情報を風向きを変え、少しずつ風を弱めるだろう。平成二十三年の全基停止後、「安全確認」の調査に合格して初めて再稼働を果たしたのは九州電力の川内原発。時は平成二十七年八月、九四年後のことだった。原発による電力供給を五十%にというのが国策だった。二十五%のところを事故。今後調査に合格して全原発が稼働しても原発電力は全電力の十八%しかいれないと言われている。恐怖が国の進む道を誤らせた。

つかりと守られ、その安心感が活気にぎわいを生み出す」と宣言文を書いている。豊洲移転という喫緊の問題には一言も触れず、首筋がかゆくなるような美辞麗句を並べている。私もその一人だが、小池氏の政治手腕に首をかした人が増えてきている。おそらく今年末頃には、あの民主党政権の凋落と同じように、輝ける都知事「は都民の信を失っているだろう。七月二日の都議選までは、小池氏は「やっぱり豊洲にします」と言えない。言えれば人は「今までの大騒ぎは何だったのだ。都知事のウケ狙いのパフォーマンスだったのか。約一年間の一三〇億円の経費、関係者の疲労と人心の荒廃は小池が決断しないから発生したのではないか」と思い離れていく。小池氏は第七代東京市長後藤新平のような「未来を構想する大胆な政策」を断行する政治家にはなれない。民意に迎合するポピュリストの一人に過ぎない（この一文は六月十七日に書いてい。その結果、が出るかもしれないが、どんな結果が出ても現都知事に対する私の不信感が消えない）。あの民主党政権の鳩山、菅の愚劣を半年に渡ってこの欄で非難し続けた。後になって「君の言う通りだった」と経営者に言われた。その成功体験をもう一度味わわなくて済めばいいのだが…。

安全安心は魅力ある言葉だが

中央卸市場の豊洲への移転は、築地市場の老朽化とスペース不足の解決策として立案された。建設がほぼ完了した豊洲を見に行つた。外から見たただけだが、広々として建物が立派である。ここで人が忙しく働く風景を思い描いた。昭和十年、日本橋の魚河岸が手狭になったため築地に新市場を開設した。八十年がたつてい。市場内の道路は狭く、デコボコになつており、建物も古い。仕事を終えて人がいなくなるとネズミの天下。市場からネズミを退治するだけでも莫大な手間暇と経費がかか

る。また市場を一切壊してビルを建てるとなると、その間仕事ができない。移転は常識に叶つてい。決定しては豊洲移転は地下室の水溜まりのせいで頓挫した。水に有毒物質（といってもその毒性は人間が毎日何十年間も飲み続ければ体を壊すというレベルのもので、タバコの煙の毒性の千分の一程度だろう）が含まれているから移転に反対の声が上がり、その声の日日に大きくなった。その反対の声に乗って「延期」したのが小池東京都知事である。専門家は「豊洲移転問題なし」と発表した。地面はコンクリート

経営も管理も六十点の拙速で

私も都知事選では小池氏に投票した。間違っていたと今は思う。近藤建氏が「一〇〇%の安全（ゼロリスク）を求める愚」と題して「一切の危険を除去しよう」と血眼になる人」の稚拙を嘆いている。経営者は判断決定が仕事だが、全くキズのない、全く欠点のない課題など一つもない。百点満点を六十点なら実行に移す。欠点をなくしてからなどと言っていれば前

経営管理講座 342 染谷和巳